

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

# 文化高知

2018年5月 NO.203



[もくじ]

- 2～3 多様化する働き方—私の働き方—…尾崎嶺士
- 4～5 第28回高知出版学術賞を審査して…佐藤恵里
- 6～7 三十三歳、後厄女子のいってみようやってみよう…益岡美妃
- 8～9 二月十～十二日に室戸市で実施した「室戸美術館」について—特別ではない、特別なアート—…西本誠
- 10 「アンテナ」突然やってきたイギリス人との出会い…下尾仁
- 11 第七回高知の音楽活性化事業 Dual KOTO × KOTO コンサート～日本の伝統楽器・箏の響き～
- 12～13 高知市文化振興事業団2～3月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

# 多様化する働き方ー私の働き方ー

尾崎 嶺士

自己紹介をする時、私の肩書きを説明するのにいつも苦労します。現在私は「DOLCE」という美容サロンを経営しております。それとは別に広告物、WEBのデザインをしたりコンサルティングのようなものをしたり、こうした書き物をするときもあります。また義実家が四十町で農業を営んでいる関係で、そこで生産されている「仁井田米」を宣伝・販売した

りもしており、こちらについてはこれから高知が誇るブランド米として全国に売り出そうと画策したりしています。

サロン業務だけをとっても、現場で技術を提供したり接客応対をするのももちろん、事務作業や経理作業、人材育成、商品の仕入れ

発注、集客メディアの作成・企画、営業や視察など挙げればキリがありません。以上のようなことからとても一言では肩書きや仕事内容を言い表せず毎回悩んでしまします。経営者ではありますがフリーランサーのほうがしっくりきたり、見方によればノマドワーカーとも言えます。あるいは「便利屋」と呼ばれても相違はないかと。

実は随分前から、そういう働き方が都心部を中心に広がっており組織に属さない人（フリーランサー）の数は激増しておりますが、高知（地方）ではまだまだ少なく理解されないことも多いです。何故働き方が多様化しているかについては割愛させていただきますが、インターネットが生まれスマート

フォンが現れたグローバルな現代において、仕事の概念・価値観が変化していくことは何ら不思議ではありません。また人工知能（AI）の発展により、その変化は今後ますます顕著になっていくと思われまます。多方面で言われていることですが、これからは今まで当たり前とされていた「働き方」は大きく変化していきます。

フリーランサーと呼ばれる人達が年々増加するのには確固たる理由があります。それは能力を活かした働き方ができる、そして自身で働き方を調整できるためです。これは私もとて大きな魅力であることを実感しております。組織に属すると望んでない仕事内

容があつたり、思わぬ不可抗力に見舞われ自身の時間が奪われていくことも日常茶飯事でしよう。また仕事とは直接関係ない社内の人間関係でストレスフルな生活を強いられますが、独立してしまえばそんな無駄な付度は無用です。自分がしたい時にしたい相手に自分がしたいだけの量をすればいいのです。現実問題としてそこまで極端なことはできないにしても、バランスを調整できることは健全な心身状態が保てる大きな要因です。

元々、私は何も時代の潮流を讀みそうといった働き方をしようと思つてしたのではありません。ただシンプルに「自分がやりたい（好きな）（興味がある）仕事を思う存分、好きな時にしていきたい」と思つたこと。

あとは世界を旅することも好きで「色々な世界を楽しみたい、見てみたい」という強い思いもありましたが、それには相当の自由な時間が必要でした。となると組織に属しては到底不可能なので二十五歳の時独立しました。そこから何事にも挑戦していった結果、今のスタイルが出来上がりました。

独立してからもろん苦勞は多々ありましたが、自分が行動した分結果がついてきて自由な生活を満喫できることは素晴らしいことでした。と同時に、自分で決めたこと、やりたいと思ったことをやるので「苦勞」は苦勞でなくなり、毎日が面白い。それは限りなくストレスフリーな働き方であったのです。挑戦を続けた甲斐あって今では、日本全国（国外は年に一、二度）を仕事と遊びで自由に飛び



回り、そこで学んだことや養われた経験が今日の仕事に活かす、という好循環で日々ブラッシュアップされていく人生になっていると感じています。

誤解を生まないよう申し上げておきますが、私は組織に属するなと言っているわけではありません。被雇用者にもたくさんメリットがありますし、そういう立場が合っている方もたくさんいると思います。被雇用者か、独立する

べきかという問題は、その他の多くの問題と同様にすっきりした正解はありません。しかし「やりたいわけではなく、しょうがなく」やっている方々や「本当はチャレンジしたい」方もたくさんいると思います。私はそういう方々に向けてトライすることを諦めないでほしいと思っており、またそうする人達が増えることで、あるいは既存の企業が働き方を見直していくことにより、新たな技術やサービスができ雇用を生みだし経済活動を蘇らす地方創生

につながると思っています。

数十年前であればいざ知れず、今はインターネット・スマートフォンがあり、「個人」でも戦える方法・フィールドが幾多とあります。斜陽産業と嘆かれている分野はたくさんありますが、大手企業が不振なのにベンチャー企業が飛ぶ鳥を落とす勢い、という話も現代では珍しくありません。参入障壁は下がり、世界の国境はなくなった今、誰でも世界を相手に挑戦できる権利を得た時代になったのです。であればやらない手はないと私は思うのですが皆様はいかがでしょうか。

私が今までやってきた中で一番大事だと思うことはとにかく「止まらない」こと。目まぐるしいスピードで進化するテクノロジーに置いていかれないように自身も常



にアップデートさせていく。そして即座に行動、挑戦を続けていくこと。私は年間百冊は書物を読み、先述したとおり国内外に赴き見聞を広め肌感覚を養っています。これでもまだまだ足りないかと本当に毎日切実に思います。どうしようもない不安に駆られることもあります。失敗もたくさんあります。しかしトライし続けます。失敗は次に繋げれば良い。失敗を怖れ何も行動しなくなるこそが自身の成長を止めてしまつた一つの方法です。私には「やりたいこと」がまだまだたくさんあるので、可能性を諦めず明日からもまたトライしていくのみです。

最後までお読み頂きましてありがとうございます。皆様への何かのきっかけになればこれ以上幸せなことはありません。

おごぎ れいじ

一九八七年生まれ、仁淀川町出身。トータルビューティーサロン「DOLCE」経営者。

## 高知出版学術賞を審査して

佐藤 恵里

本年は十二点の応募作品があった。第一次の審査を経て残った五点について委員間で精読し、第二次の審査の結果、委員全員の総意として次の三点（本賞二点、特別賞一点）を選んだ。はからずも三点は、今の社会から忘れられつつある、あるいは社会が故意に忘れようとしている事象を主題としている。なお、受賞作に順位はつけられていない。

## ■本賞

高知県部落史研究会編

## 高知の部落史

（解放出版社刊、A5判、383頁）



高知の部落史

本書は、一九七八年設立の高知県部落史研究会が二〇一七年度をもって解散するにつき、「活動の集大成」として編まれたものである。第一部中世・近世と第二部近代の二部構成で、第一部七章、第

二部九章になり、巻末に「高知県部落史研究会会報『高知の部落史』（第一号―第一五八号）全目録」と「高知の部落史略年表」を付す。

執筆者の宇賀平（第一部七章と第二部三章まで）、山下典昭（第二部四―五章）、吉田文茂（第二部六―九章）の三氏は会の中心メンバーで、史料研究や論考を会誌に発表して活動を推進してきた。内容は結成時に会が活動目的の一に掲げた「被差別部落の形成と変遷及び解放運動の歴史的研究」であり、それは巻末の「全目録」から会誌に蓄積してきた成果を基盤にしていることがわかる。

第一部・第二部ともに、高知県の全域を対象とし、全国レベルの研究に目を配りつつ実証に基づく新たな知見を導き出している。「身分外の身分、社会外の社会」というステレオタイプな見方を排し、

たとえば明治初年の「膏取一揆」

や解放令反対一揆についての論述では、田舎の庶民に近代がどのようを受け止められていたかを浮かび上がらせる。また、明治期の「新平民」と呼ばれた人々の劣悪な生活や公教育の差別的措置及び夜学会の実態から差別を克服しようとする人々の主体的な行動を追求し、さらに大正から昭和の終戦直後まで部落改善を様々に試行・摸索・要求した高知公道会、高知水平社の運動の実態を多角的に質している。

本書は初の高知県の部落史通史であり、全国的な部落史研究に寄与しうる硬質な学術書であろう。

索引のないこと、引用史料・論文のページ明記がないのが惜しまれる。読みやすい啓蒙の書ではないが、私どもの社会が生み出してお解決できず、今日では対部落の

みならずむしろ増産して多様化している差別というものを、歴史の実相に向き合うことで振り返り、考えさせる力をもっている。出版

学術賞にふさわしい著作である。

長山 淳哉 著

## 『薬害エイズ事件の真相』

（緑風出版刊、四六判、267頁）



薬害エイズ事件の真相

本書は、血友病患者に対する治療薬である血液凝固剤にエイズウ

イルス（HIV）が混入したために引き起こされた薬害エイズ事件を取り上げたものである。著者は元九州大学大学院医学研究院准教授。事件発生からすでに三十年が経過し、一般には記憶が薄れつつあるが、人体への化学物質の影響を研究する著者が医学者としての知見と、加えて人間としての道義から事件の真相を追求し、改めて事件を発生せしめた要因を問いただしている。

生化学、医学から行政、司法にわたる広範な内容を、文献、国内外の会議報告、専門家・患者の発言、裁判での被告・原告側双方の証言等々から読み解き、①医師を含む専門家の地位に比例する企業からの献金、②目先の巨額な利益に走る企業、③厚生省など役所のメンツと出世に目が眩む官僚など、実態を次々と明らかにする。「安倍英は本当に無罪か」を問いかけながら、政府の重要な政策決定に横たわるシステム上の様々な問題を点を浮き彫りにした。それは今日の森友・加計学園問題に通じている。

本書から、薬害エイズ事件は、血友病専門医、血液製剤業界、国、厚生省らが、グローバルスタンダ

ードと称して、強固な利益集団をつくり、血友病・エイズ患者というマイノリティの人権をやすやすと踏みこむことから生じたということが理解される。

総じて、本書は、医学用語のみならず行政・司法用語も分りやすく説かれ、薬害エイズ事件の全貌をダイナミックに抉出することに成功している。学術賞に値する良書と判断される。

## 特別賞

木村 哲也 著

### 来者の群像

江満雄とハンセン病療養所の詩人たち  
(編集室水平線刊、255頁)



来者の群像 大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち

本書は、現大月町に生まれた大江満雄が戦後ハンセン病療養所の詩人たちと続けた文学的交流の軌

跡を、宿毛市出身の著者が現地を訪ね、詩人たちへのインタビュを通して描き出したものである。著者は、忘れられた人々の歴史に光をあてることを課題とする歴史学の研究者。学生時代からハンセン病の歴史に関心を抱いた著者にはすでに大江関係の著作がある。大江によるハンセン病患者七十三人の詩のアンソロジーである『日本ライ・ニュー・エイジ詩集 いのちの芽』（一九五三）により、著者は同書に詩を寄せた、あるいは大江と交流のあった療養所の生存者を、一九九六年一月から二〇一七年四月の約二十年間に全国七か所の療養所に訪ね、大江との交流を十四名からの聞き書きにまとめた。

本書から、大江による病者たちの文芸活動の紹介や詩の選評、総合誌を通じての彼らの詩の世間への紹介、教養講座やらい予防法闘争への支援など、ハンセン病者の社会的地位向上を目指す一貫した活動をみることができ。なお、タイトルの「来者」は、「過去に負の存在とされた（癩者）を、私たちに未来を啓示する（来るべき者）」として、らい者への新たな希望を託した大江の造語という。

同時に、著者のインタビュに答える人々の肉声は、「隔離政策のもとでつねに受け身の患者」という従来の枠組み（あとがき）を突き崩す力があり、貴重である。

一九九六年三月「らい予防法」が廃止されたが、長く行政や世間の偏見・差別に苦しめられてきたハンセン病者への共感と彼らの地位向上に対し、大江という人物の多大な尽力に光をあて、同時に生存者の肉声を記録した本書の啓蒙的意義は大きい。大江も、病者も「歴史の表舞台から忘れられつつある人びと」である。特別賞にふさわしい著作である。

### さとう えり

一九四八年生まれ。高知県立大学名誉教授。第二十八回高知出版学術賞審査委員長。専門は日本演劇・芸能研究。著書に『歌舞伎・俄研究』（新典社）、『図説「見立」と「やつし」』日本文化の表現技法』（共著、八木書店）など。

# 三十三歳、 後厄女子のいってみようやってみよう

益岡 美妃

最近、目が無くなる夢をみました。夢の中の私は洗面所で顔を洗っています。タオルで顔を拭き、習慣的に鏡を見ると自分の顔がいつもよりシンプルではありませんか。いやいや、元々顔は薄いほうだけれども。目が無くなった自分の顔って見たことありますか？のっぺらぼうの実写です。実際笑えないくらい怖かったです。ちなみに目が無くなる夢はアイデンティティーの喪失を暗示しているそうです。

私は一年程前から「hirame\_Labo」という名前でものづくりをしたり絵を描いたりしています。制作に行き詰まった時、思うように時間が取れなかった時なんかはこの手の夢をよくみます。作れるものは二冊〜二冊まで。アクセサ

リー、絵画、ウエディングボード、お店のイメージ画像作成等々可能な限り何でもやります！のフリースタイルなのですが、意外と絵の依頼が多いです。元々こういうところが好きで、数年前から県展や市展の洋画部門に出展したり、友人に頼まれてウエディングボードや

アクセサリーを作ったりしていました。二年程前、たまたま知り合った某エステサロンのオーナーさんからお店のイメージ画像を作って欲しい、と依頼を受けました。それが初めて値段がついた作品でした。知り合いですし、お代はいただけ

hirame\_Labo



ませんと申し出たのですが、オーナーさんが「この作品に至るまで費やした時間と労力と材料があるわけやろう？ちゃんと自分の技術にお金をもらって、また次の作品に繋げんと。」と言ってくれました。その時はただただ嬉しく、ありがたいと思っていました。それから偶然、作品に値段がついたことが数回ありました。私はお金を頂くことで作品に責任を持つようになり、その価値に見合うように技術や知識を磨き、材料にもこだわるようになりました。そして、もともと自分にプレッシャーをかけようと、あえて「hirame\_Labo」の屋号を付けました。由来は、よく飲みに行っていた居酒屋で「ヒラメちゃん」と呼ばれていたので、「hirame」、現職業である歯科技工士にちなんで「Labo」、(歯科技工所 = Dental Laboratory、通称ラボと呼称します)にしよう、と。名前自体は適当です。そう、私は特に美術系の学校を出ているわけではありません。挫折組です。そして私の中にある数多くのコンプレックスのひとつです。中高一貫校で六年間ずっと美術部に在籍していた私は、当然美大芸大に興味を持ちました。画塾も行ってみ

ました。それなりにやる気はあったのですが、ただ残念なことに我が家はしがらないサラリーマン家庭。中高私立に六年も娘を通わせたら自分で奨学金借りてね」とあつさり燃え尽きていました。マジか！早く言えよ！と心の中で思いましたが、中学受験は自分が望んでさせてもらったが故に強気に出られず。現実的に返済額が想像でさる程度かつ安定してそうな職に就ける学校(もう勉強したくない)を探しました。かといって、なるだけ物づくりから離れたくなかったので歯科技工士学校を選択し、国家試験に合格し、晴れて歯科技工士となりました。

技術職なのでやりがいはあるのですが、常に納期に追われ、肩と腰の痛みに耐え、寝る以外ほぼ技工所。自分の時間など、まして絵を描く余裕もありませんでした。色々と疲れた私は大阪の技工所を退職し、高知に帰って歯科医院に就職しました。ちなみに歯科医院勤めは定時に帰れるし、技工士のことを大事にしてくれるし、天国でした。

そこで運命の出会いがありました。職場に日本画を描いていると

いう先輩がいて、「絵が好きなら市展に出してみたら？」と声を掛けてくれたのです。そして何年振りか筆をとりました。その市展をきっかけに定期的な県内の公募展に出すようになり、そして気が付いたのでした。何故こんなに好きだった絵を封印してしまっていたのだろう、何故あの時借金背負ってでも美大に行く根性がなかったのだろう、と戻らない時間を悔やみました。それからというもの常に何か作るか、描くか、しています。結婚してもほぼ同じペースで続けていますが、さすがに臨月の時の県展は壮絶でした。難産で三日も陣痛が続いている間に搬入日過ぎてしまい、主人に代理で搬入してもらいました。嬉しいことにその作品で新人賞を頂いたのですが、それも病院で意識が朦朧としている時に知りました。表彰式は意地でも行ってやる！と思い、緊急帝王切開の術後間もない体で表彰式の壇上に上がりました。すごく痛かったのですが、こんなチャンスはなかなかないと思うと迷いはなかったです。というか、産後で変なアドレナリンが出ていたのでしょう。

アイデアが止まらない！作りた

い！というより、常に何か作っていないと不安なのです。絵やものづくりが出来なくなることはもちろん、家庭を持つ責任を果せないことも、歯科技工士としての技術を忘れることも、何かひとつでも無くなってしまうと思うと、それこそアイデンティティーが崩壊しそうで怖いのです。かといって全て完璧なわけでもなく。毎年、県展の時期なんか母として機能しているか謎です。結局アイデンティティーがナントカとか言っていて好き勝手させてもらっているだけです、多分。おそらく。きつと。

とにもかくにも何もしない後悔



の後味の苦さを知ったので、不安要素は多々あれども、やりたいと思うことはとりあえずやってみるようになっています。今やりたいことは、技術や材料を勉強して沢山の知識と自信を身につけることです。

今日より明日、明日より数年先、良い作品が出来るように、怖い夢を見ない程度にボチボチと。かつ着実に成長していけるよう頑張ってみます。ごっかで、Hirane Jabo、もしくは、益岡美妃の名前を見かけることがありましたら、「ああ、好きなことやってんな」と思っていただけなら幸いです。

### ますおか みき

一九八五年生まれ。春野町在住。歯科技工士、作家、母の三点倒立を目指すも未だブルブルしている三十三歳の後厄女子。特技は十五分で歯の彫刻(リアルサイズ)が一本彫れる事。

# 二月十〜十二日に室戸市で実施した 「室戸美術館展」について ―特別ではない、特別なアート―

西本 誠

お母さんへ。応援有難う。「皆さんに助けてもらえて、本当にありがたいね」そう言って共に喜んでくれたね。嬉しかったよ。

さて、私が何をしたのか。イベント名は、『みんなで作る室戸美術館』からの実験展。循環芸術。アート共作。室戸と、○○さんと○○さんと西本のアート？展。

―あなたのおかげで全てがある―  
どなたにでも、会場での表現や作品持込を歓迎する参加型アート展。参加の皆様のおかげでジャンルについても、絵画や音楽ライブ、陶芸、立体作品、遠隔地と会場を結んだオンラインセッションによる複合アート、地域の伝統芸能、映画上映、書道など、盛りだくさ

んにボーダーレスで実施することができました。会場は室戸市の菜生市民館。三日間で、延べ約百二十人が来場くださいました。

なお、室戸美術館とは廃校や古民家を活用し実施した手づくり美術館。二〇一一年から四年間実行していました。現在、館としての存在はありません。

実施を通じ、嬉しい事が色々ありました。

「フェイスブックやツイッター見たでー」と、片付けや準備を手伝いに来てくれる人。作品や演奏や踊りを持ち寄ってくれる方々。作品を大切に、展示して下さる人々。差し入れをくださる方。観に来てくださる皆様。日々の想

いを打ち明けてくれる人。笑顔で応援してくれる人々。「はじめまして！新聞見たので電話しました。興味深い」と、行動を起こしてくださる方。チラシや告知、情報拡散のご協力。あなた様のご来場。再会、出合いの数々。

こんな事も。「関西から来ました。インターネットで見たんです。高知への移住を少し考えていて検索していたら面白そうなイベントをしている人がいたから。室戸まで行ってみよう。車で」その時、会場にはとある室戸のお爺様がいたのでご紹介して、意気投合。お爺様は、その関西の方に車で室戸の町をご案内！魅力がいっぱい伝

わったみたい。室戸移住も候補に入ったそうです!! 私にとつてこんなご縁も、とてもとても嬉しい事。他にも、会場でいくつもの出会いを見たり、いただきました。人と人がめぐり合う事は、本当に奇跡のようですね。

叱ってくれる方も。「大変やつたら電話してや! なんて言うてくれんが!!」。

書いても書いても書ききれない有り難い事の数々、本当に感謝しています。

ごめんなさい。会場ではみんなには言えなかった。何故、閉館から五年後の今、室戸勤務中でもない私が、展を突然催したかのきっかけ。もう時効だろう。しゃべってもいいよね。

開催を思いつく一カ月半くらい前。私の母は、かなり重い病気の床にありました。私は県外出身者です。母は故郷に。私は今四十代前半で、高知県で人生の半分以上を過ごしました。母の病床においては、父や妹たちが世話をしてくれていました。私は役に立たない



# 「アンテナ」 突然やってきた イギリス人との出会い



下尾 仁

周波数を合わせば、いろんな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がる。すると、面白いことがやってくる。

今から八年程前、店の閉店時間になり電気を消すと同時に、ヒゲぶらの外国人が訪ねてきた。彼は、片言の日本語で土地を探していきますと言った。何々、と消した電気をつけ店の中に入ってもらった。彼の名前はイアン・アンドリュース、イギリス人。そして奥さんもいて、名前ともごさん。二人は車で寝泊まりをしながら、送電線などの見えない土地を探し、そこに家を建て自給自足の生活がしたいのだと。何々、と興味津々で聞いていたら、イアンが実は『英国王のスピーチ』という映画を見に来たが、イオンのような人混みで

待つのが嫌で、ちょこっと車を走らせこの店に来たが、思わず話が弾んでしまい映画が始まる時間になってしまう…と。僕は、ごめんごめん、早く映画に行つて、それから携帯の番号を教えてと言つたら、携帯は持つていないので連絡はとれないと言われた。だったらもし良かったら映画が終わつてからもう一回来てと送り出した。ほんとに来たら…と、少しの食べ物と酒を用意して待つてみた。すると二時間程して二人は再び訪ねて来た。僕は、もしよければと酒を出し、詳しい話を聞くことにした。二人の出会いや、何故この高知で土地を探し自給自足をしたのかなど…。

寝泊まりは車でと言つていたので、車の中を見せてもらおうと荷物がいっぱい。寝る時は荷物を外に出し、スペースを作つてから寝ると言つたので、僕はまったく使わないような物は、土地が見つかるまでこの物置小屋に置いておけばいいと、荷物を預かることにした。そして、いつでも屋上にある五右衛門風呂に入つていきねと言うと、二人はちよくちよく訪ねてきて、お風呂を沸かして入つていた。しばらく来ない期間があり、元気にしているかなと思つていたら、大豊の山奥に土地を買つたと報告に来てくれた。この時、出会つてから二年以上である。とりあえず土地の近くに家を借り、そこに住みながら作業をすると話してくれた。

後日どんな所か見てみたくなり、ツーリングがてら原付バイクで訪ねてみた。大体の場所は聞いていたが、実際行つてみるとなかなか見つからず探すのに苦労した。しかも、やつと見つけた方がいいが、その日は留守であった。借りている家はなんとかわかつたが土地はわからず、また出直すことにした。少し日をあげ、再びイオンの家を訪ねてみた。今度は家にいてすぐ喜んでくれ、土地を案内してくれた。土地の中には小川が流れていて、どこからどこまでがイオンの土地かわからないぐらい広がった。ここへ自力で家を建てると一本一本の柱にほぞを彫り準備をしているところだった。日本人でも知らない技術を習得しており感心した。

それから二年程経ち、家が出来たと訪ねてくれた。どんな家かまだ見に行けていないが、近々行つてみたいと思つている。

イアンともごさんは、一年程前から日曜市で自分たちの作った野菜を販売している。たまに売りの野菜を、あの時はありがとうと持つてきてくれる。いやいやこつちこそ人間の強さを見せてくれてありがとうである。

しもお ひとし

一九六九年生まれ

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

# 第七回高知の音楽活性化事業 Dual KOTO × KOTO「コンサート 日本の伝統楽器・箏の響き」

平成三十年二月二十四日、梶ヶ野亜生さんと山野安珠美さんが結成している箏デュオ、Dual KOTO × KOTOをお迎えし、高知市文化プラザかるぼーと大ホールにてコンサートを行いました。

本事業では、アーティストが高知滞在中にホールの外に出てミニ



コンサートを開いたり、子ども達が楽器に触れて音を出したりといったアウトリーチも行っています。今回は、小高坂小学校、潮江南小学校でのアウトリーチ、土佐女子中等高等学校邦楽部での練習指導、桜井幼稚園年長クラスの園児をホールに招いてのアウトリーチ活動を行いました。

小高坂小学校では、かじりついて見ている児童が多い一方で、後ろのほうでひっそり聞いていた男子二人組がお二人の質問にこそこそと答えていたり、それぞれの楽しみ方で箏について学んでいました。

潮江南小学校でも、前のめりで聞いている児童がほとんどで、「曲目を伏せて演奏し曲目を想像する」というコーナーでは友達と意見を交わし合う様子が印象的でした。終了後に感想を言ってくれる児童が二十名ほどおり、お二人もその場でこんなにたくさん感想を聞けるのは初めてと喜んでいました。



土佐女子中等高等学校邦楽部では、定期演奏会で演奏する曲の指導を行い、梶ヶ野さんと山野さんからのアドバイスを一生懸命書きとめ、ほんの九十分の間にどんな演奏が変わっていききました。生徒からは、どんな曲に仕上げたいかなど聞いてもらい細かく指導してもらえてうれしかったなどの声がありました。

桜井幼稚園の年長クラスの園児をホールに招いた際には、実際に楽器に触れる人を決めるじゃんけんで負けてしまった園児が、どうしても納得できず泣きはじめ、終わってからも園に帰るのを嫌がるというハプニングもありましたが、至近距離で見える楽器や演奏に興味

津々で、お二人の演奏に合わせて元気に歌ったりもしました。コンサートにも、アウトリーチ先から多くの方にご来場いただいたほか、小学生無料招待の企画で参加してくれた親子など、0歳から年配の方まで幅広い世代の方に楽しんでいただけるコンサートになりました。



今回の高知滞在では、コンサートと四ヶ所のアウトリーチというタイトなスケジュールではありましたが、移動の合間を縫って訪れた木曜市を楽しむなど、アーティストにとっても有意義な時間となりました。

今後も、なじみのある楽器や少し珍しい楽器など、様々な楽器を取り上げ、コンサートだけではなく、子ども達にも楽しく学んでもらえるよう事業に取り組みたいと思います。

アウトリーチ参加者 三百七名、  
コンサート入場者 三百名

## 2 ~ 3月の事業から

平成二十九年

### 美術アドバンスドセミナー

美術アドバンスドセミナーは地元芸術家の育成を目的に、専門家から学び、将来的に幅広く活躍できる人材の輩出を目指す講座です。高知でハイレベルの技術あるいは知識を学ぶ機会をとの意義を持って開催しています。

今回は、美術アドバンスドセミナーの指針である「発掘・育成・発信」の中から「発信」をテーマにしました。そして、写真家の中島健藏氏を講師に迎え、「アーティストのための写真講座」―自分の作品を上手に撮る方法―撮影からアウトプットまで―を開催しました。

受講者の対象は作品発表経験者（アーティスト）とし、立体・平面といったジャンルで限定されないような講座にしました。自分の作品を、写真を撮ることを通して「客観的」ととらえ、「魅せる・伝える」ことの重要性を認識してもらい、今後の制作・作家としてのレベルアップを図れる内容としました。

二月十一日・十二日の二日間の連続講座

で、カ

メラの構造から始まり、小物や平面の撮影を

しながら、最後は画像処理の

重要な点まで一気に

駆け抜けた講座

でした。

普段カメラを扱わない受講生にとっては新鮮で、自分の作品の見え方や魅せ方に今まで以上の関心を抱いていただけたと思います。

今後も単に技術・知識を学ぶだけでなく、主体性が大切な講座になればと思っています。

〈受講者数 五名〉



### 高知市立中央公民館事業 第49回高知市民頭脳スポーツ大会

今年も高知市民頭脳スポーツ大会を開催します！種目は、囲碁、将棋、連珠（五目ならべ）、チェス、オセロの5種目（1人1種目とし、2種目以上に参加した場合は失格）。高知県内在住または県出身者であれば、どなたでも参加できます。各競技とも優勝、準優勝の方には賞状と副賞があります。

日時：2018年6月17日（日）9:00 受付開始、9:30 競技開始

会場：高知市文化プラザかるぽーと中央公民館

参加費：大人300円、18歳以下200円

【お申し込み・お問い合わせ】

公益財団法人高知市文化振興事業団「頭脳スポーツ係」

〒780-8529 高知市九反田2-1 電話：088-883-5071 メール：kikaku@kfca.jp

応募締切：6月12日（火）



# 高知市文化振興事業団

## 第三十四回 写真コンテスト・高知を撮る

平成三十年三月二十日～二十五日、かるぼーと市民ギャラリーにて、「第三十四回写真コンテスト・高知を撮る 入選作品展」を開催しました。

今回は、七十八名の方から二百五十三点の応募があり、審査の結果六十七点を展示しました。

本コンテストは、過去から現在に至るまでの県内の出来事や風景、人々の暮らしを写真で記録し、高知の様々な表情を伝える



ことで未来の高知について考えようという趣旨で行っています。

今回、記録写真部門「昭和以前の部」で特選を受賞した窪田洋一さんの作品「嫁ぐ日の朝」は、花嫁が近隣へあいさつをして歩く様子などを撮影していて、式場での婚礼が主流になった現代ではあまり見ることのできない貴重な風景を写しています。

記録写真部門「平成の部」では十五歳の高校生、片岡高輔さんが近所を散歩して見て見つけた風景を撮影した「ひそかに残る小さな昭和」が特選に選ばれ、これからの若い世代の活躍が期待される結果となりました。

計百八十点が寄せられたI・L・O・V・E高知部門からは、撮影者の高知愛が伝わってくる写真三十四点が会場に並びました。

来場者からは「小さい頃に歩いた場所の写真があつて懐かしかった」「久しぶりにこの風景を見ることが出来て嬉しかった」という声もあり、写真を通して高知の過去と現在を繋ぐ意義深い作品展になりました。これからもより多くの方に親しまれるコンテストとして長く続けていきたいと思えます。

〈入場者数・五百十三名〉

## 第70回高知市展 写真研究会 中島健藏講演会

第70回高知市展開連行事として、高知市展写真専門部会主催の講演会を開催します。

第一部・写真黎明期「アマチュア写真界の発展は土佐から」

第二部・激変の近代「写真機材から写真部門の70年を振り返る」

日 時：2018年5月27日(日) 18:00～19:30

会 場：高知市文化プラザかるぼーと 11 階大講義室

参加費：無料

お問い合わせ：公益財団法人高知市文化振興事業団 電話：088-883-5071

主 催：高知市展写真専門部会・公益財団法人高知市文化振興事業団





## 高知を撮る

第34回写真コンテスト入賞作品

高知新港を出港する大型客船。高知を楽しんだ多くのお客さんを乗せ次の寄港地に向かいます。よさこい囃子踊りや大きな振り旗、ペンライトを手に大勢で見送りました。

南国土佐を後にして (平成29年5月 高知新港)

松木 宣博

大河ドラマ「西郷どん」を毎回楽しみに見ている。

西郷隆盛は、坂本龍馬より八年前に生まれ、十年後まで生きた人物だ。西郷の人生をたどれば、坂本龍馬の場合よりも長いスパンで幕末史を眺めることができるだろう。これが楽しみの第一。

もう一つは、「明治維新百五十年」を西郷の生き方を通して問い直してみること。これも興味深いテーマだ。

幕末から明治にかけて、日本は驚くほどの短期間で近代国家を形成した。

隣国中国と比較するとよくわかる。中国はアヘン戦争によって西洋列強に侵略されてから、中華人民共和国の成立をみるまでに約百年を要している。日本の場合は、ペリーの黒船が来航して明治新国家が生まれるまで、わずか十五年である。驚異的なスピードだ。

それが良かったのかどうか、である。

明治維新によって生まれた大日本帝国は、八十年後には太平洋戦争に敗北し、滅んでいる。「滅びの芽」

が、明治維新の中になかったのか。問ってみたい。

西郷は、明治新政府の進める近代化路線に対して、大きなアンチテーゼをつきつけた人物だ。そのために「朝敵」の烙印を押された。その思想は、保守的、復古的であったとも言われるが、開明的、革命的であったという説もある。「裏切られた革命」であった明治維新に対して、第二革命を行おうとした人物だ、とも言われている。

などの人物、西郷をNHKドラマがどう描き出すか、興味深い。

林真理子の原作「西郷どん」も面白かった。特に印象に残ったのは後書きである。手書き文字で大きく三行。

「西郷どん」  
最終回、泣きながら  
書きました。

林真理子

原作者の思いがどのように映像化されるか、最終回まで追ってみたい。  
(本の虫)

## 大河ドラマ「西郷どん」



### 風俗歳時記

ファミリーシアターカンパニー GERO

# 家族という名のゲーム

作・演出・出演：伊藤キム  
出演：KEKE 後藤かおり 八木光太郎 他

2018年6月28日(木) 18:30開場 19:00開演  
高知市文化プラザかるぼーと小ホール  
一般 前売り 3,000円(当日 3,500円) 高校生以下 前売り 2,500円(当日 3,000円)  
主催・お問い合わせ：公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071

## 高知市立中央公民館事業 第185回市民映画会

市民映画会は、文化の薫り高い劇映画を低廉で提供し、教養の向上を図ることを目的に1951年より開催している歴史ある映画会です。



2018年6月22日(金)、23日(土)  
高知市文化プラザかるぼーと大ホール

『ドリーム』(2016年/アメリカ)  
11:30~、16:15~

『人生はシネマティック!』(2016年/イギリス)  
14:00~、18:35~

一般前売り 1,300円 当日 1,500円  
割引 1,000円(学生証、長寿手帳、障害者手帳など)  
※一枚のチケットで両方の作品が鑑賞できます。

【お問い合わせ】  
公益財団法人高知市文化振興事業団  
088-883-5071

## 風伯

### 「男は道具だ! 2」

薪を確保する必要に駆られて、最近ではチェーンソーを購入した。いまは細かな作業ができる電動トリマーやヘルトサンダーが必要ではないかと思いついてる。

とうとう工作室が欲しくなって一室をそれに当てようかと思っている。切りくずなどを集める集塵機を自作しようとも思っている。明らかに病気になる

少し前に「道具をもつ男たち」と題して書いた。今回はその続編。前回は友人たちの「男は道具だ」を書いたつもりだったが、「ドライバークらいしかもっていない」私自身が最近はいかに「男は道具だ」病に罹り始めている。少し前から電動丸ノコを使い始めているし、ディスクグラインダーも今ではもっている。しかも、薪ストーブの

うと思わざるを得ない。「男は道具だ」といって憚らない話を聞かされるたび、心のなかで少しだけ嘲笑気味だった自分が、いつの間にか「男は道具だ」病に罹っていくのは複雑な気分だ。

なぜそうなってしまったのか。他人に頼むと自分の思うように作ってもらわねにもいかなし、プロに頼むと結構な金額がかかる。そんなことから必要な道具を揃えて自分で作り始めることになった。

実は、家できていくのを傍で見ていて、大工はなんて面白い仕事なんだろうと思ったこともきつかけだった。プロのように仕上らないが、木を切ったり打ち付けたりして次第に形になっていくのは、確かに楽しい。

時間さえあれば、堂々と「男は道具だ」を地で行きたいと思っている。なんといってもモノ作りには「道具」が欠かせないのだから。

(霖)

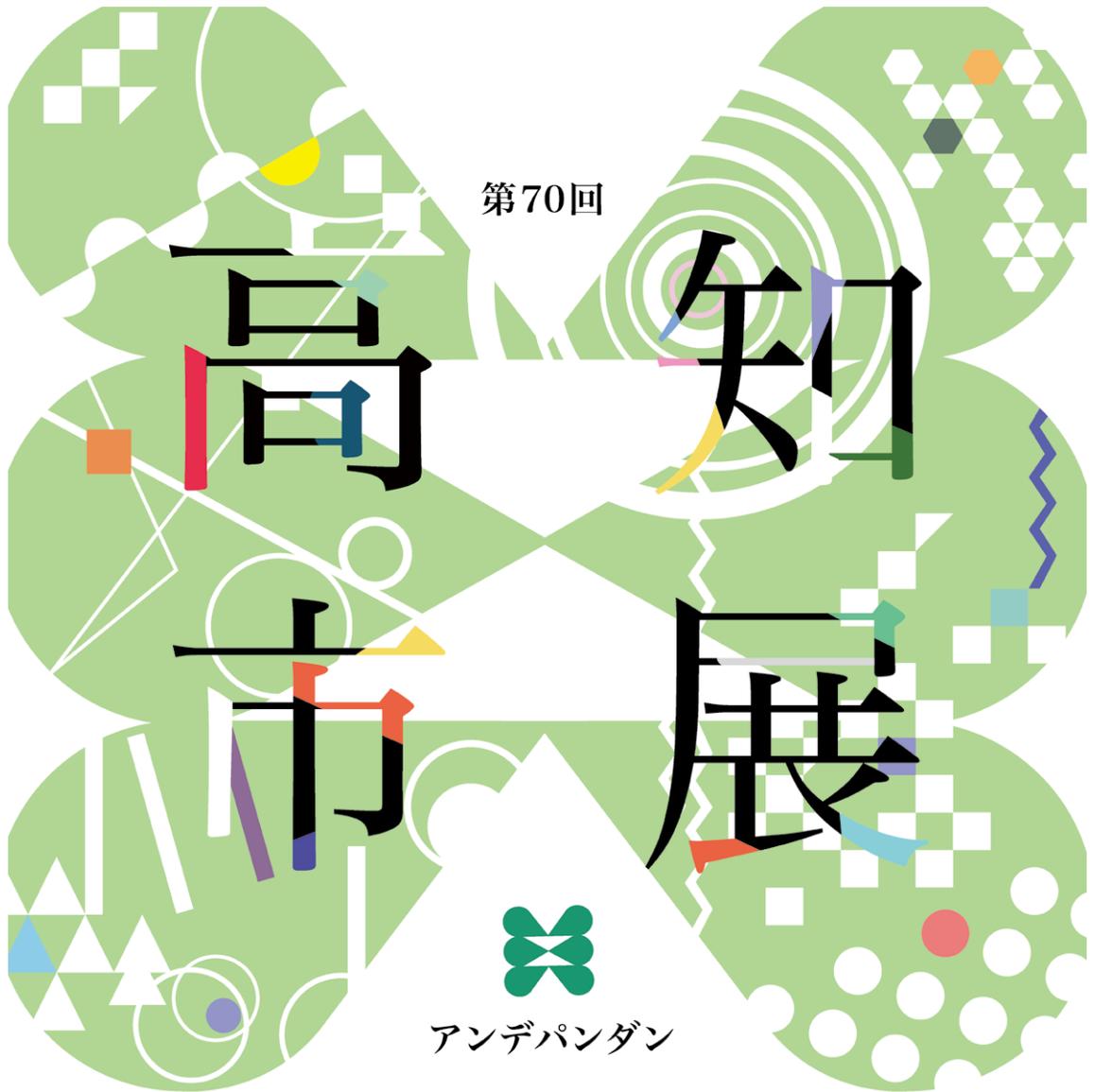
## 今号の表紙

「のんびりくま」

杉内 駿

冬眠から覚めてこれから忙しくなる季節の前に一息ついている熊

(すげうち しゅん/  
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)



2018.5.26(土) ▶ 6.10(日) 午前9時 ▶ 午後6時 [月曜休館]  
初日 ▶ 午前10時開場 / 最終日 ▶ 午後5時終了  
高知市文化プラザかるぼーと [7階市民ギャラリー]

絵画 [洋画] 日本画 書道 先端美術 [立体] 彫刻 陶芸 工芸 写真 ペン字 デザイン 北見市美術交流作品

**入場料 ▶ 前売300円 / 当日400円**

療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳の各所持者とその介護者1名、及び長寿手帳所持者と高校生以下は無料

前売券販売所 ▶ かるぼーとミュージアムショップ 088-883-5052  
高新プレイガイド 088-825-4335 ほか

**[作品搬入]**

日時 ▶ 5月20日 [日]・21日 [月] 午前9時 - 午後5時

会場 ▶ 高知市文化プラザかるぼーと [7階市民ギャラリー]

出品料 ▶ 1部門につき一般1,500円 / 学生1,000円

**お問い合わせ** 公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071

主催：高知市展代表委員会 / 公益財団法人高知市文化振興事業団 / 高知市教育委員会 共催：高知新聞社 / NHK高知放送局 / RKC高知放送 / KUTVテレビ高知 / KSSさんさんテレビ

デザイン ▶ 小崎 瑞穂



かるぼーと